



和達清夫・倉嶋 厚 著

## 雨・風・寒暑の話

NHK ブックス, 昭和49年9月1日発行, ¥ 580, 235  
ページ

本書の中に「日本人は極度に発達した季節感をもち、気候と共に暮している点は、世界でも珍しい民族といえよう」という節がある。このことを裏返えすと、日本の気象はそれほど変化に富んでいるということであって、アメリカの気候学者ハンチントンの論法を以てすれば、日本人の活動的な国民性の形成は、そのアクティブな気象・気候に負うところが大きいともいえよう。こうした意味で人間と気象のかかわり合いについての理解を深めることは重要なことである。

しかしこれは大変幅の広い問題であって、ハンチントンの「気候と文明」のように大上段にふりかぶった見方もあれば、最近主張されてきつつある気象・気候を経済活動に利用しようとする側面もあり、また寺田寅彦先生が随筆で述べられているような、人間の感覚とふれる気象についての理解を深めるという面もある。

本書のおもな部分は上の第3の観点に立って、人間の五感に感ずる季節感とその科学的説明からなり、さらに人間と気候のかかわり合いという意味で異常気象、災害、環境問題がとり上げられ、最後に著者の環境観で結ばれている。これを目次によって示すと、I. 暑い話、II. 寒い話、III. 気温の話、IV. 雲・雨・雪、V. 風の話、VI. 異常気象と気候変動、VII. 気候と人間、となっている。

気象に関する部分は著者の感覚を通して見た季節感とその説明が基調となり、これに文芸作品にあらわれる季節感のうち若者の鋭い選択眼によって選ばれたものがちりばめられて、全体として渾然一体となっている。評者の主観からすれば、本書のうちで一番優れているのはこ

の部分であると思う。そこに感じられるのは著者が気象——とりわけ日本の気象——にいただいている深い愛着のおもいであって、それが日頃ばく然と気象が好きだと思っていた評者の心に共鳴してくるのである。しかもそれが季節感という芸術的感覚によるという著者の分析は、その方のセンスは低いと思っていた評者にとって大変嬉しいことである。

評者は著者がさらに一步手をひろげて各国民の民族性と気象との関係を開明していただきたかった。ハンチントンの本には経済学者からの反論もあるが、文明という功利的な面よりもっと広い見方をすれば、各民族はその住む土地の気象・気候に影響されない筈はないと思うのである。丁度海中を泳ぐ鮪が紡錘形で、海底に住む平目が平らであるように。

気候に関する部分では、中央公害対策審議会長でもある著者の1人の環境観が示されていて興味がある。それは、「今後の人類の住む環境は、自然環境でもなく人工環境（狭義の）でもなく、自然環境を土台にし、そこに人間の意志により人間の手の加わった一つの環境といえよう。これを人間環境と呼ぶこととする。今後の人類の大きな目標は、いかに人類にとって理想的な人間環境を創造するかということにかかっている」という文章に示されている。この文章の中から、多分この目的達成に参加出来るであろう気象関係者を振り立たせるひびきがきこえてくる。

以上のようなわけで、気象にばく然と関心をもつ一般の人達に本書の一読をおすすめしたい。それによって日本の気象の良さ、有難さが理解出来るであろう。日本は資源不足国といわれているが、勤勉かつ芸術的感覚の鋭い日本人をはぐくみ、かつ今後もそうしてくれるであろう、この良質でしかも減ることのない気象資源をもつ日本は、世界中でも最も恵まれた資源保有国の一つといえないこともあるまい。ことに気象関係者にお奨めしたいのは、本書を読んで静かに考えていると、気象を一生の仕事に選んだことに対する喜びといったものが何とはなしに感じられてくるからである。

(山本義一)